
色あせないメモリー

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色あせないメモリー

【Zコード】

N4056D

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

僕と美佳は横浜の商社で働いている仕事仲間で、恋人同士だった。早春に一人で湘南海岸まで来て、海を眺めていた。僕たちは美佳が自販機で買ってきた飲み物を飲みながら海を見、キスし合つが……。

僕と美佳は海に来ていた。僕たち一人の目の前には寄せては返す波があり、ゆっくりとした時間が流れている。

僕たちは一人とも地元の横浜にある会社で働いていて、休日を利

用し、春の湘南海岸を見に来ていた。

「慎吾」

「何？」

「あたしが飲み物買ってこようか？」

「ああ、頼むよ」

「何がいい？」

「じゃあ、俺はポカリスエット

「分かった」

美佳が頷き、近くの自販機まで走る。

僕は海辺に座り込んで、春の海をじっと見つめていた。大勢の人で賑わう夏の前とあってか、人は少ない。

ふつと靴を脱いで裸足になり、海まで走って水に浸かってみた。冷たい感触が伝わってきて、僕はすぐに水から上がった。ジーンズの裾を捲くつて、元いた場所へと戻る。

自販機から歩いてきた美佳が、

「慎吾」

と僕の名を呼んだ。

「どうした？」

「飲み物買ってきたわよ。はい、缶入りのポカリスエット」

「ああ、ありがとう」

僕がそう返事し、美佳から受け取ったポカリスエットの缶のプルトップを捻り開け、呷る。

冷たい液体が喉を通る感覚は何とも言えない。喉が乾いていた僕は夢中で飲んだ。

そして立ち上がり、飲み終わった空き缶を捨てに自販機脇の「」
箱まで行った。

缶を捨て、美佳がいるところへと戻る。

美佳はミニボトル入りの冷たいミルクティーを飲んでいた。口から牛乳と紅茶が混じった匂いが漂ってくる。

僕が何気に海を眺めていると、美佳がミルクティーを飲み終わり、キヤップをして、

「人少ないわね」

と言つた。

「ああ。海水浴場は夏じゃないと盛り上がりがないからな」

僕がそう言い、軽く息をつく。

昼過ぎだった。僕たちはさつき、近くのコンビニで買ったおにぎりとパンで昼食を済ませていた。

美佳は唇に軽くグロスを塗つて、春夏用のファンデを散らしていった。元々メイクは薄めなのだ。

僕が、

「美佳

と呼ぶと、

「何？」

と返事が返ってきた。

「今日ここに来たことは、二人の大切な思い出にしような」
僕がそう言い、頷いてみせた。

美佳も、

「そうね。思い出は決して色あせないから

と言つて、次の瞬間、僕の耳元で、

「キス……しない？」

と囁いた。

「ああ」

僕が頷き、美佳を抱き寄せ、彼女の唇に自分のそれをそつと重ね
合わせる。

僕たちは成熟した大人同士だったので、互いが抱く愛情を確かめ合えるようなディープなキスをした。

唇と唇が重なり合い、互いの口の中の潤いや熱が移される。やがて僕は自分の唇をそっと離し、

「ずっと一緒にいような」

と言つて、再び美佳を抱き寄せた。

抱き寄せられた方の美佳が、

「あたしもずっと一緒にいたい」

と言い、僕の大きな肩に自分の頭を凭せ掛けた。

再び一人でゆっくりと海を眺め出す。

早春の海は綺麗だつた。天気は快晴で青い空が広がり、白雲が遠く青空の彼方まで棚引いていて、鮮やかな緑が生い茂つている。僕は不意に、持つてきていったリュックからミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、キャップを捻つて呷つた。

ゴクリ、ゴクリ……。

喉が鳴り、僕は熱い砂地に水が吸い込まれるように水を飲んだ。そしてミネラルウォーターを飲み終えると、息をつき、ペットボトルを仕舞い込んで美佳を抱く。

その日。

僕たちは夕方まで人の少ないビーチにいた。

沈んでいく雄大な日を背に、僕たちは誓いのキスを交し合つ。口付けが終わり、互いのおでことおでこを合わせた僕たちは、運転してきていた車へと戻つた。

その夜は車中泊だつた。僕は運転席、美佳は助手席にそれぞれ座り、シートを倒して横になつた。

興奮のためか、僕はなかなか寝付けない。仕方がないので車を出て、一人夜空の星を眺める。

春の星座に見入つていると、背後に温かい感覚を感じた。振り返ると、眠つていたはずの美佳がそこにいて、僕を抱いていた。

4

「……あたしも眠れないの

美佳がそう呟き、僕を背後から抱きすくめる手を強くした。

僕が、

「今夜は一人きりでじつやつて過ごしあつ

と言い、風や波が匂いで静かになつた浜辺で抱き合ひながら、朝朝

を待つた。

抱擁が終わり、一人で朝までいろんなことを語り合つていると、やがて太陽が東の空から昇り始める。僕たちはその頃眠気が差し始めて、車へと戻つた。

その日の昼まで僕たちは車の中で眠り、眠りから覚めると起き出して、横浜まで向かつた。

気付けの「コーヒー」を一杯飲んだ僕は、車を運転しながら、高速道路へと入つていく。

ハイウェイを走つていると、生温い風が吹いてくる。

僕たちは吹き付けてくる南風に煽られながら、横浜を目指した。

僕と美佳はそれから付き合い続け、その年の夏に入籍した。

僕も美佳も一緒になることで互いに満たされ合うことを知つていた。

二人の新婚生活は横浜の1LDKのマンションで始まった。

僕たちの結婚生活は忙しさからか多少のずれがあつたものの、幸せそのものだった。

僕が美佳から妊娠の事実を聞き知つたのは、その年の十一月だった。

美佳が産休を取り、僕が美佳や生まてくる子供のために、仕事に一層精を出したのは言つまでもない。

(ア)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4056d/>

色あせないメモリー

2010年10月8日15時07分発行